

2021年度

S B

小 論 文

3月12日(金)

人文社会科学部 (言語文化学科)

10 : 00 ~ 11 : 30

【後 期 日 程】

注 意 事 項

試験開始前

- 1 監督者の指示があるまで、問題冊子、解答用紙、下書き用紙に手を触れてはいけません。
- 2 監督者の指示に従って、全部の解答用紙(2枚)に受験番号を記入しなさい。

試験開始後

- 3 この問題冊子は、2ページあります。はじめに、問題冊子、解答用紙、下書き用紙(1枚(表裏))を確かめ、枚数の不足や、印刷の不鮮明なもの、ページの落丁・乱丁があった場合は、手をあげて監督者に申し出なさい。
- 4 解答は、すべて解答用紙に記入しなさい。(下書き用紙と間違わないよう十分注意してください。下書き用紙は採点対象となりません。)
- 5 文字数制限のある解答用紙の記入については、下記の点に留意すること。

- ・書き出しは一マスあける。
- ・改行したら一マスあける。
- ・句読点はそれぞれ一マスとする。
- ・小さな文字「っ」「ゃ」「ゅ」「ょ」は一マスで使う。

- 6 問題は、声を出して読んではいけません。
- 7 配点は、比率(%)で表示してあります。

試験終了後

- 8 問題冊子と下書き用紙は、必ず持ち帰りなさい。

次の文章を読み、あとの設問に答えなさい。

生まれてはじめて他者と言葉を交わし、見知らぬ場所に足を踏み入れ、恋に落ちる——無数の「はじめて」を経てもなお、わたしたちが世界を知り尽くすことはない。それは、ただ世界が広大だから、というだけではない。常に「おわり」が別の「はじまり」の源泉となり、その繰り返しの度に新しい言葉が生まれるからだ。

それはいつも、なにかの「はじまり」であると同時に「おわり」をあらわしている。未知の世界を発見する時とは、既知の領域を離れる時でもある。そして、一生の間には、それまで蓄積されてきた経験の皮膜が一度に無化し、未知の時間が始まる予兆で満たされる瞬間がある。

時間と空間がただ一点に圧縮されるのに似た密度をあじわう。そんな局面を、誰しもいくつか思いだすことができるだろう。わたし自身も、これまで経験してきた数多の「はじまり」と「おわり」の瞬間を思い起こすことができる。本を読むなかで新しい概念に出会い、天からの啓示を受けたような衝撃を覚えたとき。鑑賞した絵画や映画作品の表現に包みこまれてしまつて、しばらくのあいだ現実には立ち戻れなくなったとき。そして、忘れることのできない人との出会いの数々が、それ以前の状態には逆行することのできない不可逆な変化を起こしてきたとき。

こうした記憶の広がりの中で、今にいたるまでもつとも強い磁力を発し続けているのは、妻の出産に立ち会ったときの記憶だ。娘が母胎の外へと這いずり出て、最初の産声を上げる準備をしているその刹那、自分の全存在がその風景のなかへ融けこむ感覚に襲われた。

鈍い灰色の光彩に包まれたその小さな身体が、はじめて息を吸いこんだ次の瞬間、一度に全身が赤みを帯び、生命の色に染まる。直後に部屋中に響き渡る産声とともに、原初の「はじまり」が世界に顕現する特異点だ。

彼女の身体がはじめて自律的に作動したその時、自分の中からあらゆる言葉が喪われた。同時に、とても奇妙なことだったが、いつかおとずれる自分の死が完全に予祝されたように感じられた。自分という円が一度閉じて、その軌跡の上を小さな新しい輪が、別の軌跡を描きながら、回り始める感覚。自分が生まれたときの光景は覚えてはいないが、こどもの誕生を観察することを通してはじめて、自らの生の成り立ちを実感する気もした。

それから現在に至るまで、自分はこの円環的な時間の甘美さに隷属してきたように感じる。まだ一人では生きていけない彼女の成長をいつも側で見守ることによって、自分の生きる意味も無条件に保障されてきた。わたしはそのあいだ、自分自身のために新たな言葉を探ることを必要としなかった。ある意味では、「こどもを育てる」という免罪符を得ることで、自分自身の歩みを振り返ることを怠ってきたのかもしれない。

それでも、全身の力をふりしぼって大泣きしたり、無邪気にあたりをびよんびよん跳ねまわったりする娘の姿を見るたびに、わたしの心は彼女の発する

色とりどりの感情で充溢^{じゅういつ}していた。そこに付け足すべき言葉など、なにひとつなかった。

しかし、いま、自分と子どもを覆っていた泡の皮膜が弾けようとしている。娘はある時から、自分だけの感覚を獲得して、自由に問いを発しはじめた。一方的に庇護^{ひご}を受ける段階を脱して、目の前に広がる豊穡な世界へと自らのちからで分け入ろうとしている。これもまた、自分と子どもの関係におけるひとつの「はじまり」と「おわり」なのだろう。であれば、彼女が生まれたときに感得^{はかな}した儂い印象がいつのまにか消え去ってしまわないように、そのあたらしい受容器となる言葉にかたちを与えたい。そのためにも、娘の誕生と共に一度終わった自分の学びのプロセスを起動し直さなければならぬだろう。

求めているのは、娘が生まれた瞬間に体験した、あの不思議な時空を表すための言葉だ。自己が世界の背景に融解していく、あの安堵の正体はなんだろうか。なぜ、自分の死への恐怖が祝福へと転化されたのだろうか。この奇妙な感覚に名前を与えずして、自分の思考を進めることはできない気がする。

『出典』 ドミニク・チェン『未来をつくる言葉 わかりあえなさをつなぐために』より

問一 傍線部①「この円環的な時間の甘美さ」とはどのようなことか、四〇〇字以内で述べなさい。(配点五〇%)

問二 傍線部②「なぜ、自分の死への恐怖が祝福へと転化されたのだろうか」と筆者は書いています。それについて、あなたの考えを四〇〇字以内で述べなさい。(配点五〇%)